

田牧一郎の カリフォルニア稻作便り

最終回

連載の終わりに（その2）

購読者の皆様そして編集者の方々、長い間ありがとうございました。今回をもちまして連載を一休みさせていただきます。

●6年間で…

1996年4月にこの連載を始めてから、6年間合計60回の掲載をしていただきました。

激しく動くカリフォルニアのコメ業界の中で、私自身にとっても激しい変化の時期でした。

1989年6月からカリフォルニアに移り、精米会社の立ち上げ、工場の建設試運転と忙しく動きながら、コメの生産を見てきました。

1995年秋には自分たちで作った精米会社を完全に離れ、外の人間として会社とその製品を見る立場になりました。自分で決めたことでありそれが新たなスタートでしたが、やはり複雑な気持ちになつたものです。

それまで兼業のコメ作りであったのがその年からは、専業コメ作りとして生産者の立場で力

リリフォルニアのコメ業界に関わりだしました。

そして精米関連会社へのコメ関連技術のコンサルタントや、新しい精米会社の立ち上げ時を手伝つたりと、コメ作りをしながらカリフォルニアで仕事をしてきました。

●おいしい「コメをどう作るか

私の基本はあくまでも「おいしいコメを作る」ことです。そして水田から食卓に載るところまで、どのようにすれば良くなるのかを考え、現実のものにすることが今の私の仕事です。

この中には、コメの栽培方法も含まれ、生産物の品質と栽培方法の関連や目標に向けての改善対策の検討も継続しています。

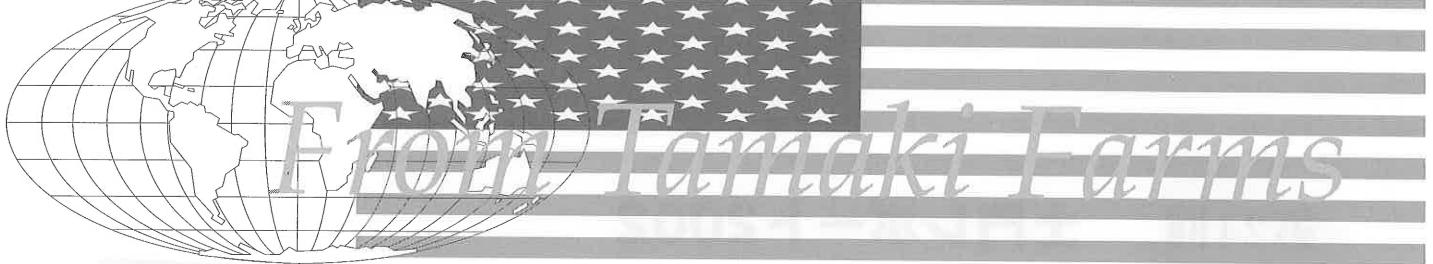
栽培の道具や精米の技術も最終製品に大きな影響を与える部分であり、これらの技術についてもカリフォルニアのコメ業界に紹介しながらより高い品質を目指したコメ作りを心がけてきました。

品質向上と同時に製品の価格対策もしていくなければ、売れる製品にはなりません。水田での生産コストの低減対策や新しい栽培方法で、収穫量の向上が図れるのか。あるいは新しい品種を導入することによって、問題が解決されるか、など検討事項が切りがないほどあります。

これらのカリフォルニアでのコメ作りに関する経験から、日本でのコメ作りに役に立ちました。



たまき・いちろう／1952年12月
郡山市生まれ。中学卒業と同時に就農。89年渡米。カリフォルニア州で稻作（約80ha）を開始。
タマキ・ファームス・ジャパン
TEL045-781-6426 FAX 045-781-6427



●私は今年50才になります

今まで私は、50は非常に大きな数字だという印象を持っていました。

自分が20代30代の頃には、50代の先輩方はとても大きく、農村社会でその責任を背負いながら生きている大変な世代に見えていました。

しかし一方では冷めた見方をしており、「コメ余り」の時代に年に一回の米価値上げ闘争のみで、どうして稻作経営を維持していくつもりなのか? 建前上、集落機能維持を最優先にと言いながら、なんとか自分だけ良くなろうと言う意識。まさしく我田引水のために目一杯エネルギーを使う事を良しとする風潮。

そのような部分は、長い間に染みついた生活の知恵であり農村社会で生きていくための手段がそうさせており、たぶん今も、もしかしてこれからも延々と継承される、日本の農村の特殊性なのかもしれません。

私には、農村の年輩世代に感じたネガティブな印象もあり、気づくと、否応なしに自分がその世代に分類されるようになってしまったことが何とも不思議な感じです。

改めて、これから的人生をどう生きるのかを考えています。

現役をいつ頃離れるのか、あるいは離れなければならないのか、それまで何をどうするのか、そしてそのあとどのようにできるのか?

会社勤めのサラリーマンとは違い、定年を自分で決めることのできる自由は失いたくはありません。現場を離れるためのボリシーをしつか



カリフォルニア州の稻作試験場。世界に通用する新しい品種の改良が行われている

●日本の農業者はどうなるのか?

り考え、状況の変化に対応しながらその時を見極めたいと思っています。これからしっかりと考え方準備をしていかなければと考えています。

しかし、経済的な理由もあり、少なくともあと10年~15年は現場に居て、仕事を続けなければなりません」と思っています。

この期間にどんな仕事をどのようにできるのか、あるいはしなければならないのか考えなければなりません。

彼らもこの様な競争は当然のことと受け止め、さらなる生産性の向上をはかり競争力の強化をしています。生産を増やし、有利に販売して再生産を繰り返すべく努力をしています。

日本の農業経営者はどこまで考えているのでしょうか?

不況の日本経済とは言え生活水準は高く、農村社会も共同意識が働き、何となく皆と一緒に居れば何とかなるかもしれない? そんな危ない雰囲気を感じます。

人や組織を頼る前に自分自身をとことん磨き、国際的な農産物の競争に勝ち抜ける経営を目指さなければなりません。

自覚されているかどうかは別として、もうすでに国際競争農業の中に皆さんも組み込まれているのです。

歴史の後戻りは不可能です。

次の新しい時代にどう生きるか、日本農業がこれから世界にどう役立てるのかが、農業経営者も含めた日本農業存在の理由となるのでしよう。

それぞれの経営がそれぞれの存在意義を、国際社会の中で見いだすことが経営発展のキーになると思います。

一緒にがんばってみませんか。

アメリカの農業生産者は政府の保護をもらいながらも、国内のものや輸入農産物とも競争しながら経営に当たっています。

コメも価格次第でオーストラリアや中国から入ってきます。